髪の花

小林美代子

講談社

髪の花

昭和四十六年八月二十日　第一刷発行

著者＝小林美代子

発行者＝野間省一

発行所＝株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二

電話＝東京（九四五）一一一一（大代表）

振替＝東京三九三〇

印刷所＝豊国印刷株式会社

製本所＝株式会社大製

定価＝四六〇円落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。

© 小林美代子　昭和四十六年　Printed in Japan

0093-125372-2253　(0)　（文1）

目次

髪の花　7
幻境　127
さんま　173
老人と鉛の兵隊　187
女の指　201
あとがき　227

裝幀＝村上豊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

髪の花

髪の花

母上様、三回目の手紙をさしあげます。前の二回の返事を随分待ちましたが、ついに下さいませんでしたね。一回目は自分の名を思い出せた喜びを先ずあなたに知らせたくて、まだ記憶に戻らないひらがなの二つ三つを友人に聞きながら書きました。私は昔きっとそうであったように、段々一人前になれるような気がいたします。どうぞお見守り下さい。

これからも一月に一度ずつお便りいたします。

先生は私に、あなたは何者でここがどこか知っているかと聞かれて、名は貝塚ふさ子といい、この精神病院の患者であると、すらすら答えることができました。それから三月経ちました。古い患者が、あなたはたしか入院してから七年目だと教えてくれました。言われれば七年目にも、或は四ヵ月目にも思えて私にはよく判りません。

私は思い出せない母上様に向って手紙を書いています。私にも母があった筈なので、あなたの生きている可能性の方を信じています。母の亡い患者は、家族が再発のさいの事故発生をあまり

に恐れ、複雑な家庭の事情もあって、押して引き取ることもされず、病院で一生を終る人が多いのです。母のある患者は、総てに目をつぶって、何回でも退院させられています。私も母上様が私を見つけてくれたら、そうして貰えるものと信じています。

私が描いている母上様は、幼ない私が弟妹達と争って掛けても、二、三人そっくり腰かけさせられる、腰掛け心地のよい、広い仏像のような膝を持った母、独特の日向くさい体臭がして無口であるが、その匂いに包まれてはしゃいでいると酷く安らかである。だが顔がどうしても想像できません。何処の人か、私にかかわりがあるのか、ないのか、何をする人か、沢山の顔が浮かびますが、あなたらしい顔は浮かびません。お会いしても名乗って貰わないと判りません。病院の友人は私も病院に捨てられたのだと言います。でも私の親や兄弟が私を捨てるようなことをするとは思えません。届いても届かなくても私は手紙を書き続けます。友人達は出す手紙の住所を暗唱していて、すらすらと封筒に書きます。時々返事がきて、私に見せてくれます。私が一番困っていることは、母上様の住所を知らないことです。でも住所を知らないからと手紙を書くのを止める訳にはゆきません。私はお話しがしたいのです。心の奥の誰にも言えないことを全部聞いてほしいのです。私があなたと住んだ土地なのか、又は私が結婚していて夫と住んだ土地なのか、遠い昔の知人の住所なのか、目黒区八雲二丁目二番地という住所が時々口をついてでます。私が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

知っている所番地は世界でそれだけです。果してそういう所があるかどうか知りません。でも私はそこにあなたと住んでいたことがあると思いこみ始めています。いや、思いこむことで、あなたへの手紙を書ける状態にしておきたいのです。母上様、どうぞ住所とお名前をお教え下さいませ。私は一応目黒宛に名前を貝塚様として手紙を書き、看護婦に投函して貰うよう頼んでいます。封筒はあけたままで渡して、看護婦が中を読んでから封をして出してくれることになっています。封をしていては受付けてくれません。妄想で迫害を受けているように書いてある場合出して貰えません。時には重い罰を、大抵は軽いが、罰を受けることがしばしばありますが、それを書いては出して貰えません。文になっていない支離滅裂の手紙はその場で破かれます。私の二度の手紙は、はいはい出してあげますよと、優しく優しく言って看護婦が受取りましたが、果して出して貰えたのか、戻ってきたのか、出さずに看護婦が破り捨てたのか、戻りもせず、返事もこず、破り捨てたとも言われず、私にはどうなっているのか判りません。私は私の日常を書き続けます。

母上様、あなたは何歳なのでしょう、先生は私を三十歳だと言います。先生が年を決めてしまうのはおかしいと思いませんか。

あなたが亡くなっていたら、座敷の病室で、ダンボール箱を机がわりにして、手紙を書いてい

る私のそばで、それを読みとっていてくれると信じています。

私のいる病棟は六病棟あるうちの第三病棟で、患者数は七十人、重症病棟と退院間近い者のいる開放病棟との中間の、軽症病棟であることは前にも書きました。その殆どが時には波があるが、それ以外は全く正常です。ただこの病棟は開放病棟と違って、閉鎖されていて、退院したくも引きとり手のない患者が集められています。殆ど国費で入院しており、国から貰う日用品費も千三百円では外出する金も残らず、家族のいる患者が、面会の時届けて貰ったりんごを、剝いて食べているそばから、その皮を貰って、歯で皮をしごいて味をみる程なので、一度の外出も外泊もできず、一生をこの病棟で終えます。たまには退院できる可能性のある患者がまぎれこんでくることもあることはあります。私達にはその人が、全く別世界の人間に思え、何故その人は外泊、外出、退院ができ、私達はできない運命に別れているのか不思議でなりません。

まぎれこんできた一人に、電気王といわれる夫と、上品な三人の男の子を持つ河合しず子さんがおります。病状のよい時は夫と子供達が迎えにきて、西武園などに外出してきます。私達の持っていないハンドバッグを持っていて、鍵を外してドアーから出されると、忽ち立派な母親と化して、元気な所を見せる為に、庭でのびのびとキャッチボールをしている子供達を、指を上げ

て甘い声で呼びます。子供達は号令をかけられたように駆寄ってきます。私達には雲上人であり、確固たる正気の代表である女医程の頼もしさで、代る代るのおしゃべりに、口に耳をつけて些細なことも聞きとめてやっています。私達は患者以外の者を、自分の意志に従わせる力がないので珍らしくて、格子窓に折重なってそれを見ています。しず子さんには外出するなど当り前のことなので、申し訳に私達に軽く手を振って、茶色の車に乗りこむのです。

私達は一ときしず子さんの一挙手一投足に自分の姿を重ねて、今窓から見える、区切られた庭の外の世界を空想し、車の中に夫と子供に囲まれている夢を見ます。

テレビで見た、自動車で走る両側の畑には、里芋の大きな葉が重なってゆらぎ、ねぎ坊主が頭を並べている。さつま芋の葉は勢いよく道まではびこり、その道端にひなびた食料品店や八百屋が三、四軒肩を寄せあっていて、八百屋で、片手に包紙にくるんだ帚を下げた主婦が枝豆を手にしている。手の平程の赤いミニスカートをはいた赤坊を腕に腰掛けさせ、他の手に風呂敷包みの風呂道具を下げた若妻が通る。手拭いを被りトマト畑の雑草を引き抜いている老夫婦が見える。道は何処までも続いて私達の通るのを待っていてくれる。男達は家にいる女達の為に働いている。自分の為に働いてくれる者を持っているとは、何と凄いことだろうと思う。その何でもない世界、それが私達は欲しいのです。

たとえ夕方には病院に戻らねばならないとしても、一ときでも人間らしい生活を味わってみたいと思います。

しず子さんは二、三日前より病状が悪化しました。十二畳の病室の真中に地蔵そのままの丸い肩と、丸い膝を揃えて座り、終日壁に目を据えています。時々まばたきするだけです。頭の中に幾種類もの妄想が、同時に八方から稲妻のように明滅して、それを一つもこぼさず意識させられ、見せられるので、めまぐるしく神経がぼろぼろになる程疲れきっているのです。油汗を流しながら捉われて動けないのです。

各病室の床下に、一人の布団の位置の下に一人の男の割合で、自衛隊の服の男達が、びっしり潜んで、夜になるのを待っている。患者達が熟睡したら一斉に犯そうというのだ。勤務室の看護婦のベッドの床下にも二人いる。薄暗い床下で全員ことりとも音をさせないで、獣のように猛々しい肩をして、うずくまっている。隣りで静かにレース編をしている患者や、看護婦に知らせたいが、怖ろしくて口に出せない。体がこきざみに震えてくる。夜がこわい。逃げたいがどの道も飢えた自衛隊員で、真黒に埋まっている。

一方で別の自分が、群青の空の真白いふくふくした入道雲の上に、一枚の紙になって抵抗もなく飛ばされている。先程から下りたいのだが下りられない。内臓も頭も足もカラカラに乾き、繊

維だけになって、サヤサヤと音を立て、目が痛い程白く晒されている。そよりとした風にもとんでもない方に飛ばされて、気を失いそうになる。火に煽られれば、紙の中で動いている小さい自分が、墨絵のように浮かびでる筈だが、太陽の光では自分が現れようがない。雨が恐ろしい。ネリが流れて、水の影絵のように足から溶けて崩れて消えてしまう。

下の麻雀牌程の屋根の上や、マッチの棒程の線路や、木の上に、蠅のように真黒に集った人々が、手に手に松明を燃やして、不思議な紙を焼こうと待ち構えている。叫んでも届かない、咽喉が乾き水が欲しい。休める所が欲しい。私は人間であることを証明したいが方法がない。空は私に関知せず、透明に広大無辺である。限りなく漂っているしかない。

又別の自分は、薬罐頭の大男に手を前に縛られて座らされ、青龍刀で肢の肉を裂かれている。覗いてみると、肉はピンクの磯巾着のようにひらひらと捲れて、奥から石のような骨が覗き、その骨が私の顔になって、ほほえみかけていると思ったら、その真中に電気鋸の刃が喰いこみ、その顔は苦痛に歪み、真珠をぽつりぽつりと目から落す。私は可哀相だと思う。足の間は真珠で埋まる。電気鋸が頭に突抜ける音を立てて骨に喰いこんでゆこうとするが、骨はその刃を弾き返すほど堅くて、身のよじれるような痛みが全身を貫く。早く切断が終らないかと思うが、最後の一個所で、何時間も鋸が回っていて終りはない。

三つの自分を冷静に眺めている四つ目の自分がいる。一つの頭の中で同時に沢山の自分が勝手に行動し続けて休みがない。

私も経験者なので、その疲労困憊の辛さが判るのですが、中に入って除き安らかにしてやることができません。

諦めて置物になったしず子さんを目の端におきながら、私は自分の遊びをします。着せ替え人形のように、自分を女優にしたり、夫を捨てた女にして、楽しみながら中庭を眺めています。

看護婦が食事を運んできて、おかずのいり玉子と二、三本の春菊を全部、飯の上にあけて掻き混ぜ、しず子さんの鼻をつまんで仰向かせ、さじで口に押しこみます。鼻をつままれて否応なく口が開くからです。しず子さんは押しこまれても飲み下す術を忘れています。看護婦は仕事が後につかえているので、押しこめば自然に飲み下すかと、忙がしく次々と押しこみます。しず子さんはふぐのように頬をふくらませ、苦しくなって半分吹き上げて、畳に散らします。看護婦は諦めて去り、口に残った飯はやがて腐敗して、異様な臭気が口から漂いでます。

便所には自分で立ちますが、見ていないとクレゾール液を飲もうとします。

看護婦がしず子さんにきた手紙を私にあずけてゆきました。病院にくる手紙は全部看護婦が封を切って渡すのです。患者には脱走しないよう金を持たせません。金の有無を調べるのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.